# 核兵器に地球を守らせるために

京極　怜子

大学生になって最初の夏、私の友人達の多くにとって８月９日は何でもない日であることを知った。
広島で生まれ育った私にとって８月６日は少し特別な日だ。
夏休みの自由な生活に慣れ始めたタイミングということも相まって、むし暑い体育館や野外テント下での平和集会に参加するために登校するのは少し憂鬱であった。
当時の私が平和学習に人一倍熱意を持っていたとは思わない。
むしろ色々な人から被爆体験を聴いているうちに徐々に惨たらしいエピソードにも耐性がついてきて、気づけば夏の風物詩として数学や英語の授業と同じくらいの感覚、熱量で取り組むようになっていた。
何の因果か大学進学を機に同じく原爆投下地である長崎に住み始めて３年、今では８月９日も私にとって８月６日と同じくらい平和問題を意識する日である。

私が広島で行った平和学習量は全国的にみれば非常に多く、また私の友人の多くは長崎県外からの進学者であることも分かっている。
しかし長崎にある程度馴染みがある集団の中でさえ８月９日に関心を持っている人が少数派であるとすれば、広島、長崎と縁なく過ごしている多くの人は一体どのくらい核兵器について考える機会があるのだろう？
私が思っているよりもずっと少ないのではないだろうか？

これまで受動的に平和学習を続けてきた私にとってこの疑問は、初めて自ら見出した問題となった。

さて、ロシアによるウクライナ侵攻が始まってから約１年半が経つ。
戦争の開始にも勿論驚かされたのだが、一度躍り出たこの大きなニュースが数カ月たっても収まらないことの方が衝撃であった。
その間、空襲で多くの人が無くなった話、危険を顧みず戦地へ赴く人々や国外から救援活動を行うためにウクライナへ入国した人々への取材等を何度も読んだが、21 世紀に現在進行形で起こっている出来事とはとても思えなかった。

しかし今の私はどうであろう。少しずつ減っていく報道に伴って関心も薄れていき、大きな動きがあった際にニュースを見てこの話題を思い出す程度になってしまった。

現在地球上には約 200 もの国家が存在するが、全ての国同士が平和的に共存できているわけではない。
核兵器の保有量で互いを牽制し、抑止力として利用している国があるのは事実である。
世界各地の戦争や国家間の対立が無くなる目途が立たない以上、核兵器廃絶が達成されるのはずっとずっと先のことであろう。
不可能かもしれないとさえ思う。

では核兵器はなぜむやみに使用されることなく存在し、抑止力として機能出来ているのだろうか。
それは核兵器の威力、恐ろしさを皆が知っているからだ。
地球を回復できないまでに破壊して人類自体の滅亡を近づける代物であることも、使おうものなら全世界から非難を浴びせられることも明らかであるからだ。
そして今の私たちが「核兵器は使用してはいけないもの」と認識できているのは、戦争や核による事故について教えられその恐ろしさを学んできたからだ。

核の恐ろしさを学ぶには、2 つの努力が重要であると私は思う。

まず 1 つ目は、伝える努力だ。
ニュースや街頭での広報活動、日常会話中での話題など知る機会が沢山あれば、その中の 1 つくらいは誰かに関心を持ってもらえるかもしれない。
知る機会の創出は既に知っている人にしかできない。
つまり長崎に住む我々はこの課題を担う一員であるはずだ。

2 つ目は、知る努力だ。
これは、知る機会を掴むことと得た情報を深めることの 2 段階に分けられる。
私は他の人と比較して平和問題に高い関心を持っていると自負していた。
しかしウクライナ侵攻については受動的に情報を得続けた結果、気づけばどんどん忘れていった。
このオピニオンを執筆するにあたり自身について振り返ったことで、私の関心の大きさを新聞社やテレビ局に委ねてしまっている実態に気づき、危機感を覚えた。
私は報道量でしか事の重大さを理解できていなかったのだ。
では何がいけなかったのか。それは、アンテナを張り話題を掴むことはできていたが、そこから思考を深めなかったことだと思う。
情報を受け取る側にも一定以上の能動性が必要なはずだ。

終戦からもうすぐ 80 年、被爆者の生の声を聴く機会が失われつつあることが問題視されている。
遺産の修復保存や語り部の継承など様々な活動がなされているが、惨劇の風化を完全に食い止めることは出来ていない。
そしていつか誰もがその脅威を忘れてしまったとき、もはや核兵器は地球を守らないのであろう。
核が地球から無くなるより先にその日が来ないよう、私たちは知る努力を、伝える努力を続けなければならない。